

九所明神本殿・左右殿

九所明神を構成している3つの建物を初めて見た人は、典型的な仏教建築だという印象を受けるかもしれないが、実際にはこれらの建物は日本の土着の宗教である神道の礼拝の場として機能している。仏教と神道（外来の宗教と区別するために使われるようになった用語である）は、6世紀に仏教が日本に伝来して以来、互いに交流を続けてきた。そして、時として、政治的な闘争においてこの2つの宗教が対立したこともあったが、神道の神殿は仏教寺院の中に建てられ、実際に寺の守護神として位置づけられることも多い。一般に、神道の神を祀る神殿の建築的な特徴は仏教寺院とは区別できるものだが、九所明神の本殿と2つの左右殿は周囲の寺院建築と区別がつかない。それにもかかわらず、ここに祀られているのは仏陀ではなく、日本列島全体における重要な神社と同じく、神道の神である。本殿の中には八幡三神の像が祀られている。すなわち、武士の守護神である八幡と、その母親である神功皇后、そして女神である比売神の三神である。左右殿にはその他の神の像が祀られている。九所明神についての最も古い記述は1212年の皇室の記録に出てくるが、現在の建物は17世紀初頭に建てられたものである。